

野口米次郎 —— 「二重国籍」詩人の生涯と作品世界

堀 まどか

博士（学術）

総合研究大学院大学

文化科学研究科

国際日本研究専攻

平成 21 年 9 月 審査

目次

序章

- 〇一 はじめに
- 〇二 問題提起——戦後直後の文学者批判と中世美学研究の否定
- 〇三 従来の研究の評価軸（先行研究の問題点）
- 〇四 研究史・評価史
- 〇五 本研究の目的と方法
- 〇六 構成

第一部 出発期——様々な〈東と西〉、混沌からの出現 はじめに

第一章 渡米まで

- 一・一 生い立ち・文化的環境
- 一・二 欧米著作物の影響（英文学・英詩集の検証）
- 一・三 伝統保存主義への関心——穂積永機、志賀重昂らとの交わり
- 一・四 明治二〇年代の芭蕉再評価の潮流
- 一・五 渡米直後

第二章 アメリカ西部で培われた詩人の精神

- 二・一 「ミラーの丘」での生活と〈芭蕉〉
- 二・二 詩作と文壇デビュー
- 二・三 ポーへの心酔
 - 二・三・a ポー剽窃の疑惑
 - 二・三・b ポーと短詩理論
- 二・四 芭蕉からの暗示——第一詩集 *Seen and Unseen*(1896)
- 二・五 ポーへのリアリズムと *Hokku*——第二詩集 *The voice of the valley*(1897)
- 二・六 雑誌『トワイライト』と日本人

- 二・七 米国の詩壇潮流に関する認識
- 二・八 ポー、ホイットマン、芭蕉

第三章 *The American Diary of a Japanese Girl* 境界者としての原点

- 三・一 ニューヨークでの執筆
- 三・二 米国シヤポニスム隆盛期と *The American Diary of a Japanese Girl*(1901)の成立
- 三・三 匿名性に対する議論と「女性」性による執筆
- 三・四 米国社会の〈日本〉認識に対する不満
- 三・五 作品内における日本詩歌の詩的イメージ
- 三・六 〈日本〉表象への自覚と〈祖国〉の再認識

第四章 英国文壇デビュー

- 四・一 自己出版までの過程
 - 四・二 *From the Eastern Sea*(1903)の評価
 - 四・三 「東洋」を覗く視点
 - 四・四 英語の問題
 - 四・五 英国文壇での成功を経て
 - 四・六 野口の日本帰国と日本社会の反応
 - 四・七 英米滞在中の日本との交信
 - 四・八 『帰朝の記』(1904)の意図と反応
 - 四・九 文化翻訳への志
- #### 第一部 まとめ

第二部 東西詩学の探究と融合——「象徴主義」という名のパンドラの箱 はじめに

第五章 日本の象徴主義移入期の芭蕉再評価

- 五・一 一九〇五年、象徴主義旺盛期の前後

- 五・二 「象徴詩人芭蕉」の出現——蒲原有明
 - 五・三 日欧文芸交流への期待と挫折
 - 五・三・a 「あやめ会」の成立
 - 五・三・b 詩人たちの抗争
 - 五・三・c からまわりした野口の存在
 - 五・三・d 『あやめ草』の作品内容
 - 五・三・e 「あやめ会」の紛争後
 - 五・四 有明による象徴主義の展開
 - 五・五 野口の有明・泡鳴に対する評価
 - 五・六 象徴主義詩人らの行方
 - 五・七 三木露風の象徴主義理論にみる、野口の影響
 - 五・八 〈露風放追〉から象徴主義拡大の潮流
 - 五・九 野口米次郎の指向性
 - 五・十 英国詩界に対する認識——イエーツとブリッジズ
- 第六章 帰朝後の英文執筆 一九〇四年—一九一四年**
- 六・一 海外の新聞雑誌への多彩な執筆
 - 六・一・a 新時代の日本紹介者
 - 六・一・b 日本の時事通信
 - 六・一・c 日本美術の紹介
 - 六・一・d 前衛雑誌『リズム』への寄稿
 - 六・一・e 浮世絵の解説者として
 - 六・一・f 日本批判のまなざし
 - 六・一・g 野口の執筆範囲と、「英語で書く」ということ
 - 六・二 日本詩歌の紹介——*The Pilgrimage*(1909)
 - 六・二・a *Hokku* と *Uta* の紹介者
 - 六・二・b 日本のモチーフへの取り組み
 - 六・三 不可解な「日本」の解明——*Through the Torii*(1914)
 - 六・三・a *Through the Torii* 出版の周辺
 - 六・三・b 「鳥居」の意味
- 六・三・c 伝えたい「日本」
 - 六・三・d ウェーリーの批判
 - 六・四 狂言と能の紹介
 - 六・四・a 狂言と能の翻訳紹介（一九一四年以前）
 - 六・四・b 野口とイエーツの対話
 - 六・四・c 一九一四年の英国公演での能の紹介
 - 六・四・d フェノロサからパウンドへ
 - 六・四・e 雑誌『謡曲界』の英文欄
 - 六・四・f 『謡曲界』以外の能に関する執筆状況
- 第七章 一九一四年の英国講演とその邦訳、そしてその反響**
- 七・一 日本詩歌についての英国での講演
 - 七・一・a 英国講演と *The Spirit of Japanese Poetry* (1914) の出版
 - 七・一・b 日本協会での講演——沈黙の美学とマラルメ
 - 七・一・c オックスフォード大学での講演——ペイターと音楽性
 - 七・一・d 挑発的な提言の背景と目的
 - 七・一・e 芭蕉「古池や」の評価と、読者による完成
 - 七・一・f 「落花枝に」称賛に対する批判と《エピグラム》認識への批判
 - 七・一・g 野口の講演に対する英米における評価
 - 七・二 邦訳『日本詩歌論』(1915)の問題
 - 七・二・a 英文著作との落差
 - 七・二・b 日本詩歌論に対する日本国内の評価
 - 七・三 日本詩歌の翻訳
 - 七・三・a 詩人の視点で捉えられた日本文化論
 - 七・三・b 比較対照の視座
 - 七・四 次世代への影響
- 第八章 欧米モダニズム思潮の中での野口**
- 八・一 イギリス文壇のモダニズム先駆けの動き
 - 八・一・a 野口の一九一四年以降

- 八・一・b パウンドとイマジズム運動
 八・一・c パウンドと「日本」——サダキチ・ハルトマンか野口米次郎か
 八・一・d エドモンド・ゴスの一派と、新詩運動の一派
 八・一・e 「インド」の詩歌への関心
 八・二 アメリカ文壇と「新しい詩(New Poetry)」への動き
 八・二・a ハリエット・モンローの雑誌『ポエトリ』
 八・二・b 雑誌『ポエトリ』に紹介される東洋詩
 八・二・c ハリエット・モンローの野口に対する評価
 八・三 雑誌『エゴイスト』への寄稿
 八・四 野口とアメリカ詩壇——『米国文学論』(1925)
 八・四・a シカゴ詩壇に関する認識
 八・四・b ホイットマン、そして芭蕉
 八・五 雑誌『ダイアル』への寄稿
 八・六 アイルランド文学への認識——『愛蘭情調』(1926)
 八・七 神秘主義、オカルティズム、神智学協会
 八・八 世界的同時性と野口の「日本」
- 第九章 大正期詩壇における野口の位置**
 九・一 象徴主義から民衆派への系譜
 九・一・a 象徴主義のその後
 九・一・b 民衆詩派と野口米次郎
 九・二 一九一八年の渾沌——雑誌『現代詩歌』の特集号より
 九・二・a ホイットマンの見方
 九・二・b イマジズムへの言及
 九・二・c 戦争詩について
 九・三 雑誌『日本詩人』
 九・三・a 野口米次郎記念号——朔太郎らの野口論
 九・三・b 野口をめぐる論争——「中央亭騒動事件」
 九・四 雑誌『詩聖』
 九・四・a 若い詩人たちと野口の関係
- 九・四・b 『詩聖』の中の野口評
 九・四・c 論争・評論を遠巻きに見る態度
 九・四・d イズムの超越
 九・五 雑誌『詩と音楽』との関係
 九・六 渾身の日本語詩
 九・六・a 詩集『沈黙の血汐』(1922)——独立の威厳と切実な内省
 九・六・b 詩集『山上に立つ』(1923)——富士山への讃美と幻滅
 九・六・c 詩集『表象抒情詩集』(1925～1927)——世界へ発信された「太陽崇拜」
 九・七 デイレッタニズムと芭蕉
- 第十章 昭和戦前期詩壇における野口の位置**
 十・一 詩雑誌『詩神』
 十・二 詩雑誌『詩と詩論』
 十・三 雑誌『國本』と野口の指向性
 十・三・a 「國本」とは何か
 十・三・b 「自然礼讃」の主張
 十・三・c 国際的視点からの普遍性と日本主義への傾倒
 十・三・d 「古代」認識と『萬葉論』(1926)
 十・三・e メレデイスと「ベガニズム」
 十・四 西洋近代知識人の指向性
 十・五 戦時下の日本文壇——『月刊文章』より
 十・六 詩雑誌『蠟人形』
 十・六・a 戦時下の日本詩人と、野口への眼差し
 十・六・b ナチス・ドイツ下の詩人たちの紹介
 十・六・c 決別の一九四二年
 十・七 東西文壇の媒介者としての、挫折
- 第十一章 ラフカディオ・ハーンに対する認識**

- 十二・一 野口のハーン言説
- 十二・二 野口とハーンの接点
- 十二・三 *Lafcadio Hearn in Japan*(1910)出版の意義
- 十二・四 *Lafcadio Hearn in Japan*の内容——ハーン弁護の必要性
- 十二・五 『小泉八雲』(1926)の内容
- 十二・六 〈境界者〉の評価に関する考察
- 十二・七 ハーン、ケーベル、野口米次郎の共通項
- 十二・八 日本主義とハーン評価

第二部 まとめ

第三部 「二重国籍」性をめぐって——境界者としての立場と祖国日本への忠誠はしめこ

第十二章 野口の「境界」性

- 十二・一 韓国併合に対する批判
- 十二・一・a 帰国当時と *Japan of Sword and Love*(1905)
- 十二・一・b 一九一〇年時点の韓国認識
- 十二・二 「二重国籍者の詩」
- 十二・三 『芸術の東洋主義』にみる詩人の役割認識
- 十二・四 大正から昭和へ
 - 十二・四・a 二重生活の一元化
 - 十二・四・b 傍観者の暴力と、「詩の金堂」の崩壊
 - 十二・四・c 『われ日本人なり』(1938)
- 十二・五 キプリング、そしてホイットマンからみる野口の「世界意識」
- 十二・六 野口の「世界意識」と、大東亜共栄圏の思想
- 十二・七 共感を生む〈境界〉性

第十三章 アジアとの交流と、アジア認識

十三・一 日本とインドの関係

- 十三・一・a 野口米次郎とインド
- 十三・一・b 「日印協会」を中心に
- 十三・二 二〇世紀初頭の西欧世界の地殻変動とR・タゴール
 - 十三・二・a タゴールの国際デビュー
 - 十三・二・b 一九一六年前後の日本のタゴール評価
- 十三・三 野口のタゴール認識
 - 十三・三・a タゴールとの距離
 - 十三・三・b インドとアイルランドに対する理解
- 十三・四 インド旅行——インドの混沌と魅力
 - 十三・四・a インド講演旅行の背景と自己認識
 - 十三・四・b 魯迅の野口評価と失望
 - 十三・四・c インド知識人たちとの出逢い
 - 十三・四・d *The Ganges Calls Me*(1938)と二重性
- 十三・五 タゴールとの論争
 - 十三・五・a 国際的な政治論争
 - 十三・五・b 野口の「日本を背負う者の苦悩」
- 十三・六 日本の戦争とインド独立
 - 十三・六・a 日本とインドの温度差
 - 十三・六・b 国際放送への協力
 - 十三・六・c インド独立の呼びかけ
 - 十三・六・d ガンジーへの称賛と共感
- 十三・七 「闘争」の歴史、そしてメレディスの森

第十四章 ラジオと刊行書籍に見る「戦争詩」

- 十四・一 「戦争詩」というジャンル
 - 十四・一・a 「拙劣な詩人」の刻印
 - 十四・一・b 「戦争詩」の概説
 - 十四・一・c 当時の「戦争詩」認識
- 十四・二 戦争詩とモダニズム

十四・三 『宣戦布告』(1942)の両義性

十四・三・a ラジオの〈御用詩人〉

十四・三・b 削除処分

十四・三・c 最後の二篇——詩人間での評価

十四・三・d 「大東亜建設の失敗」の先にあるもの

十四・四 『八紘頌一百篇』(1942)の両義性

十四・四・a 体制迎合からの逸脱

十四・四・b 『八紘頌一百篇』の内容

十四・四・c 最後の二篇——自らの消滅

十四・五 革新への意識

第十五章 父から子へ・子によって開示された野口の普遍性

十五・一 敗戦後の著作

十五・二 イサムへの系譜

十五・二・a 『Like a Paper Lantern』と〈あかり〉シリーズ

十五・二・b 「親譲りの仕事」

十五・二・c イサムが所持した父・米次郎の著作

十五・二・d 太陽の構想

十五・三 後輩詩人たちの戦後評価——蔵原伸二郎と金子光晴

第二部 まとめ

結論

参考文献

資料篇

凡例

- ・ 本文は、新字新仮名を基本とする。が、著者の流儀により異体字(旧字)を用いる場合がある。
- ・ 日本語の著作の場合、作品名、雑誌記事名には「」、書物(書籍)名と新聞・雑誌名には『』を用いる。
- ・ 外国語の著作の場合、作品や雑誌記事には、を、書物の題名や雑誌名はイタリックを用いる。
- ・ 本論で頻繁に扱われる英語雑誌名には、『』で日本語表記したあと、原語イタリックとする。(例、『ラーク』*The Lark*)

※野口米次郎の書籍物は、*The Spirit of Japanese Poetry*(1914)と、その翻訳書『日本詩歌論』(1915)とがあり、それらは別作品として区別する必要があるため、書名は翻訳しない。野口以外の欧文書に対しては、基本的にはイタリック表記の後に仮和訳を、『・・』(仮題名、堀、と入れる。)

- ・ 引用は、比較的長いものは、本文と区別するために、前後一行空け、全体を二字下げとする。原文の改行部分から引用する場合は冒頭をさらに一字下げる。(つまり冒頭三字下げのものは原文改行部からの引用で、冒頭二字下げのものは原文の途中からの引用を意味する。)本文の途中に引用する場合は、《》を付す。引用箇所は、典拠の表記、発表時の表記に従う。
- ・ キーワードや強調、また「いわゆる」を意味する語句には、《》を用い、引用箇所《》との混同をさける。

序章

日本人が僕の日本語の詩を読むと、

『日本語の詩はまづいね、だが英語の詩は上手だらうよ』といふ、

西洋人が僕の英語の詩を読むと、

『英語の詩は讀むに堪えない、然し日本語の詩は定めし立派だらう』といふ。

實際をいふと、

僕は日本語にも英語にも自信が無い。

云はば僕は二重国籍者だ……

日本人にも西洋人にも立派になりきれない悲しみ……

不徹底の悲劇……

馬鹿な、そんなことを云ふには時既に遅しだ、

笑つてのける、笑つてのける——

『二重国籍者の歌』中「序詩」

〇-1 序め

二〇世紀前半期に、国際的に最も知名度のあった日本詩人といえは、野口米次郎(1874-1947)、あるいはヨネ・ノグチと呼ばれた人物である。野口米次郎は、日本文化の特質を英語で執筆して、生前はラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn:1850-1904)やタゴール(Rabindranath Tagore:1861-1941)と比較されて「世界的詩人」として名前が知られていた。英語とともに日本語においても多彩な言論活動を行い、戦前の日本では、国際的文化人の大御所として若い世代から尊敬を集めてもいた。しかし戦後は、「知る人ぞ知る」とはいえ、一般的にはほぼ忘れられた存在となり、日本文学史の表舞台からは姿を消し、今日にいたるまで、その生涯や作品史を通観する研究はおこなわれてこなかった。

近現代詩史では、野口が英詩を書いて英米文壇で好評を博し、帰国後にあやめ会を企画してすぐに解散したという話までは知られているが、その後のことがほとんど何も具体的には知られていない。たとえば『日本文学大辞典』(新潮社、一九五二年)には、英米詩壇でのデビューのことやまた日本詩壇ではあやめ会の設立と解散、一九一四年に英国講演がおこなわれたことまでが記されている。その後のことについては、日本語詩を書いていることや海外に日本文化を知らしめた『第一人者』とは記されていても、その内実の紹介はない。また『日本近代文学大事典』(講談社、一九七七年)においても、日本語の著作が数多く存在することは紹介されているものの、野口の経歴としては一九一四年の英国講演の後に一九一九年から一九二〇年にかけてアメリカ各地で講演を行ったことが紹介されるところで終わっている。『増補改訂・新潮日本文学辞典』(新潮社、一九八八年)でも、英米文壇でのデビューの経緯の解説が中心で、一九一四年の英国講演までが記されているのみである。

これら文学事典類の「野口米次郎」に関する記述に共通しているのは、日本帰国(一九〇四)以後の経歴について具体的な説明がほとんどないということである。野口の日本語詩集『二重国籍者の詩』に触れ、日本語歌や浮世絵や伝統文化について数多くの随筆や評論を国外に向けて書いた国際的な人物、日本語詩の「表現や発想が普通の詩人と異質」で「一種生硬な翻訳風な印象を与え」とともに、新鮮な効果を与える独自^①の詩人、「ユニークな詩人」^②などと書かれてはいても、大正期以降の日本詩壇での活動や詩史における位置については漠然としたものになっている。昭和期の戦争協力についても全く触れられていない。

なぜ、帰国後の活動が示されず、野口米次郎の日本文壇での存在が見過ごされてきたのだろうか。これは、日本近代文学史を考察する上での大きな陥穽ではないだろうか。文学事典類は野口の中期以降について、言及を避けてきたのではないか。じつは野口米次郎は、戦後の多くの研究者の間

では——一部にはそうではない研究者もあらわれたものの——かなり低い評価が与えられてきた。それには幾つかの理由が挙げられよう。

最大の理由としては、「日本主義」にはしつた「ナシヨナリスト」、「戦争協力者」といった負のレッテルが大きく作用したことがあげられる。少なくとも野口の戦時期活動に関して追究検証する研究者はあらわれておらず、この点に関して「軽蔑」「嫌悪」「忘却」以上の反応は起こらなかったといえるだろう。戦後に具体的検証のされぬまま曖昧に封印されてきた諸問題はあまりに多いが、野口についてもそのひとつで、問い直される必要があるのではないか。

たとえば、野口について最もよく知られているエピソードは、タゴールとの間で日中戦争の是非をめぐって国際論争を起したことであろう。人道主義者タゴールに対して、野口は、日本帝国主義を弁護した「ナシヨナリスト」として、国際的に愚かさを露呈した喜劇役者として、記憶されている。(ちなみにインドでは、全国的に崇拜されている詩聖タゴールと論戦を交わした日本人として、野口の名前は思いのほか知られている。)

また「戦争協力者」としてのレッテルに加えて、野口を、未熟な英語によつて日本紹介をして世界詩人の名を手にした二流詩人、二流の日本紹介者、と軽視する傾向が根強く存在する。ほそぼそと続いている野口研究も、全てがとはいわないが、この否定的見解からお完全に脱却できていないようにみえる。野口が自らについて《日本語にも英語にも自信が無い》とうたった『二重国籍者の詩』(一九二二年一月)の「序詩」(冒頭参照)のイメージに引きずられ、また萩原朔太郎が野口について、観念、詩語、情操などが《全体として完全な外国人である》と評した点が強調される傾向がつつびいている。しかし、このしばしば引用されてきた萩原の《野口観》そのものを再検討する必要があるということは、外山卯三郎もかつて指摘していたことである。実際のところでは、萩原は《げに野口氏の情想ほど、私にとつて絶大の敬意を感じさせるものはない》と述べており、日本語の

未熟さはあるものの、詩人としては傑出した情感と理想と哲学とを持ち合わせていると賞賛し、尊敬の念を表明していたのである。

朔太郎がいかに詩人としての野口を高く評価し尊敬していたかは、一九二六年五月一日に起きた《中央亭事件》(本論九二二d)にも明らかである。その日、中央亭で開かれた詩話会の席上、野口のスピーチのあとで敬意を表して立ち上がった朔太郎に対して、プロレタリア派の詩人たちが示した態度に朔太郎が憤怒して、乱闘騒ぎになったのである。

また朔太郎以外にも、多くの日本の同時代詩人や後輩詩人たちが野口を評価し、敬愛していた事実は、例証にことかかない。野口は長きにわたつて日本詩壇に存在感を示し、影響力を発揮しつづけていた。そういう野口が存在を回復するなら、大正、昭和戦前期の詩壇のシーンは、ずいぶん様子がちがって見えてくるのではないか。

そして、野口米次郎がイサム・ノグチの実の父親であるということも、野口という人間に対する否定的評価と嫌悪感を強めてきた理由のひとつに数えられよう。イサム・ノグチは世界的に著名な彫刻家として死後も人気がたかまつているが、そうであればあるほど、野口米次郎は母子を捨てた非道な男として嫌悪されてきたのである。たとえばドウス昌代氏は『イサム・ノグチ―宿命の越境者』(二〇〇〇年)の中で、米次郎に対しては、《ブロークンな英語だけでなく、教養そのものにも限界がある日本青年》で、《英語で書く詩だけでなく、人間的にもどこかおぼつかないヨネ》といった評価をし、一方、イサムの母、レオニー・ギルモアに対しては、高学歴で《鋭い感性》をもつ自立心の強い知的女性といった好意的な評価をしている。米次郎は《肉欲の捌け口の延長》として《仕事上の便宜》としてレオニーと暮らしはじめ、《妊娠させただけではい。身重の彼女を見捨てた》男であり、その《いい加減さ》に彼の友人たち(スタッダートやパットナム)も見る目を変えた」と書いている。⁵⁰

要するに、戦争協力者、巧みに世界進出した二流詩人、アイデンティテ

イも思想も定まらない「二重国籍者」、日本語の下手な「外人」の情操を持つ日本人、そして白人女性と子を捨てた身勝手な「男」といったイメージがむしろ一般的に定着しつつあるように思える。

もちろん、戦後日本の研究者のなかにも、野口米次郎という多岐多彩な活動を人物を総体として研究する必要性を認識している人々はいたゞその重要性を認識しつつも、しかし、全生涯を研究対象とすることには、ためらいがあったといえよう。

ひとつには、野口が全世界的に繰り広げた言論活動が、あまりに多岐多彩にわたり、一体、どこから如何に取り掛かれればよいか、手をこまねいてきたのが実態だったのではないか。いいかえると、野口米次郎の残した仕事は領域横断・複合領域的な研究の構想なくしては捉えきれないのである。しかし従来手が付けられてこなかった〈穴〉にあたる部分が解明されただけで、野口米次郎という人物の活動全体の評価が大きく変わる可能性がある。そして、それはひとりの詩人の再評価にとどまらず、もしかしたら、二〇世紀における国際文化交流の実際の動きについて、従来の認識を一新するほどの意味をもつかもれない。

もうひとつのためらいは、戦後思想の轍が強烈であったため、その外に安易に出てはならないという規制が働いていたことによるだろう。野口の戦時期活動が、この詩人に対するネガティブな評価を決定したといつてよい。野口が戦争協力者であり、愛国主義の主唱者だったことはよく知られており、戦後は一貫して批判と軽蔑の対象となってきたのである。そのため、朔太郎の評言なども、吟味されることなく、否定的な方向ばかりが強調されることになったのではないだろうか。

野口の戦時協力に対する嫌悪感、それを論ずることを、タブー視することになったといえよう。実際に戦時期にラジオから流れる野口の愛国唱歌や戦意昂揚詩を聴き、政治と強風に結びついた詩人としての野口を体感していた者たちにとっては、野口に〈帝国主義者〉の烙印を押し、彼を忘

却の彼方に押しやる方が、むしろ自然なことだったと思われる。また、日本の近代文学研究自体が戦後に本格化したことを考えれば、近代文学の研究対象と方法が、戦後直後の評価枠をなかなか破れなかったのも当然だった。

次に、戦後の野口米次郎評価の様相について、そして、それが現在のわれわれの研究のうちに影響を及ぼしている可能性について、問題提起を試みたい。

〇二 問題提起——戦後直後の文学者批判と中世美学研究の否定

まず、戦後の野口評価を決定するような「事件」ともいえるべき出来事が起こったことからはじめよう。敗戦直後の国内で「文学者の戦争責任」追及の動きが巻き起こり、列挙された「重要犯罪人」のなかに野口の名があった。

戦後の「文学者の戦争責任」の追及には、ひとつにはGHQ主導による公職追放¹⁾などの外発的なものがあり、もうひとつには新日本文学会や日本共産党などによる追及という内発的のものがあった。GHQに追放された文筆家は三〇〇人前後で、野口の三作品もGHQによって没収されている。(ただし、GHQのマッカーサーは国際派詩人としての野口に好意的で敬意を持っており、敗戦後は野口と面会したが、野口が面会を拒んだというエピソードが残されている²⁾。)しかし、戦後の野口評価に致命的なダメージを与えたのは、GHQの追及ではなく、それに先駆けて行われた後者の「内発的な」追及であった。

国内の追及とはどのようなものだったのか。周知のように、敗戦直後から知識人や文化人の戦争責任追及がいわれはじめたのだが³⁾、その論争はその後何十年も尾を引く多大な問題点を孕んだものである。一九四五年秋には、戦争犯罪人リストが公表され、名指しの徹底的批判が行われた。特に若い世代による追及は激しい糾弾をみせ、小田切秀雄らは『文学時標』⁴⁾

創刊に際して、『日本ファシズムが文學に加へた蛮行と陵辱』を思い出せと叫び、『ファシストと陰に陽に力をあはせた作家、評論家』を糾弾した。彼らは、『純粹なる文學の名において、かれら厚顔無恥な、文學の冒瀆者たる戦争責任者を最後の一人にいたるまで、追及し、弾劾し、読者とともにその文學上の生命を葬らんとするものである。』と宣言し、『文學領域において民主主義を確立するための第一歩』に、民主主義の文學再生の前提が、『戦争責任者』に断筆させること、『文學上の生命を葬る』ことと定義したのである。『文學時標』では、毎号、『文學檢察』欄で文學者の責任追及が行われて、反響を呼び注目度も高かった。

小田切秀雄の糾弾する対象作家の中に、野口米次郎の名が入っている。小田切は、『特に文學及び文學者の反動的組織に直接の責任を有する者、また組織上さうでなくとも従来その人物の文壇的な地位の重さ故に、その人物が侵略戦争のメガフォンと化して恥じなかつたことが広範な文學者及び人民に深刻にして強力な影響を及ぼした者、この二種類の文學者に重点を置いて取上げた』ととして、

菊池寛、久米正雄、中村武羅夫、高村光太郎、野口米次郎、西條八十、齋藤瀏、齋藤茂吉、岩田豊雄(獅子文六)、火野葦平、横光利一、河上徹太郎、小林秀雄、亀井勝一郎、保田與重郎、林房雄、淺野晃、中河與一、尾崎士郎、佐藤春夫、武者小路実篤、戸川貞雄、吉川英治、藤田徳太郎、山田孝雄

の二五人を挙げた。これらが『文學の世界からの公職罷免該當者』であり、彼等の『戦時中の文學の愚劣と卑小とを實際上ふみにじつて』いくことが、戦後文學の第一歩であると宣言された。つまり戦前の大御所作家たちの文學者生命を駆逐することが、『民主主義文學』の出発の目的と定められたのであった。

この過激な追及姿勢そのものは、問題と視点が拡散して、次第に勢いは収束していったが、論争勃発時の過激さと、戦前の文化人に対する批判追及の容赦なさは、その後、長く大きな影響を残したのである。戦前と戦後の思想断絶、戦前思想研究の全否定が、ここに明白に起こったのである。とくに野口や高村光太郎などの著名な文學者で戦争協力が明白であった者たちに対しては、徹底的な批判がなされ、同情を残すような気配は全くなかった。

野口は一九四七年、その徹底批判の嵐の中で、病気になる、七月には死を迎えた。高村らが戦後長い年月時を生きて、反省と悔恨を綴って再評価までの道のりを得たのとは、決定的に運命を異にしている。戦争詩を書いて戦争協力した者たちの多くは、戦後は、高村のごとく、文學者や詩人の戦争責任問題を経て、戦争詩の評価と自己批判そして戦中詩の書き換えなどによる自己の再構築を果たし、文學者として復権していく。だが、戦争責任追及が過激に始まったところで死んでしまった野口には、その機会はあたえられなかった。

そして、ここで改めて注意を喚起しておきたいのは、文學者の戦争責任追及の事態が起こったと同時に、戦前の国文学研究の否定、中世美学研究の否定が起こったことである。「文學檢察」で人気を博した『文學時標』の創刊号に、左翼系国文学者・近藤忠義(1901-1976)が「戦争責任の追及——國文學時評」と題して『甚だしく立遅れ恥づべき汚泥にまみれてゐた吾々の國文學』の『大小の戦時責任』を『摘發斷罪』する必要を宣言している。国文学が『滔々たる痴呆性的な國策追隨』をし、あらゆる学派の學者たちが『超歴史的に理解せられた中世主義への轉落』という共通の犯罪を犯し、『かの悪権力に阿諛追従して、誣告密訴を事とし或は空疎な精神主義を押し賣りして自ら眞理探求の道を閉塞した』という。これは戦前期から戦後まで一貫した近藤の史観だった。『家持或は西行、定家、後鳥羽院か

ら宗祇芭蕉に至る中世的文人への新たな思慕・辯護の盛況や文献学派、文藝学派、浪漫派、民俗学派などがその思想的根拠として持っていた《中世的反動ロマンチズム》こそが、戦時中の精神主義に荷担し、《真理からの遁走》をし、《戦争末期の歴史的性格を見事に反映した》という事実を、批判追及しなければいけないと近藤は主張したのである。このように、文学者の戦争責任を追及する中において、戦時中の中世研究の潮流も同時に批判されたのであるが、その後、その問題性とそこに至る過程についての論議や検証はうやむやのまま終わったといつて良いだろう。

じつは野口の歩んだ道のりも、この中世美学や中世的文人への評価と敬慕の潮流とに大いに関係する。なぜなら、次のような時代の構造があるからである。アメリカそしてイギリスで見事なデビューをはたした野口は、欧米の大御所から若手の詩人たちの東洋への関心をかきたて、イギリスにおけるそれまでの俳諧評価の方向を変えるような役割を果たした。野口は芭蕉俳諧に深く傾倒して、その精神哲学を英語で解説した。芭蕉は江戸時代元禄期に活躍したが、その精神は「わび」や「さび」といった中世の禅宗に発するものを尊重していたのである。その野口の芭蕉評価が、イマジスムと呼ばれる前衛詩運動やその前段階の英国文壇の潮流に働きかけた。そして、とりわけ野口のおこなった一九一四年の英国講演は、日本の若き知識人たちや象徴主義詩人たちに、芭蕉俳諧へ目を向けることを促したのである。こうして二〇世紀前期には、芭蕉俳諧を象徴主義芸術としてとらえる動きが国際的に渦巻き、それが前衛詩運動にも刺戟を与えるシーンが繰り返されたのだった。

日本の戦時中の中世研究の潮流は、その展開という面を大きくもっている。つまり、この戦前の中世美学への傾斜をいかに捉えるかは、日本の「近代」ひいては世界の「近代」や「モダニズム」をどう捉えるか、ということに深く関わるのである。

本論は、野口米次郎の人生を一九世紀末から二〇世紀初頭の世界状況、

国際的文化交流の中で問い直すものである。断言しておくが、その問い直しは、「野口は戦争詩を書いたにせよ優れた詩人であった」とか、「戦時協力は差し引いても国際的文化交流の重要人物として忘却すべきでない」とかいう類の野口個人の再評価を目的とするものではない。

戦時期を含めて野口米次郎の活動の全容について、客観的に国際的な観点から再検討を加えること。それは、既成の日本近現代文学史から、また二〇世紀世界の文化交流史や思想交流史から欠落したページを確実に埋めるものとなるだろう。そしてそれは、それらの全容についても、かなり重要な再考を促し、新たな構想に導くような可能性を秘めていると思う。野口米次郎の生涯と作品世界とを再検討する目的は、まさにその可能性を拓くところにある。

〇三 従来の研究の評価軸（先行研究の問題点）

野口米次郎という詩人は一般の人びとには、戦後急速に忘れられていった。しかし、戦後に野口研究がまったく行われなかったわけではなく、その評価が否定的なものに終始したわけでもない。篤実かつ国際関係や近代史を見渡しながら公正な評価を心がけてきた研究者も少なからず存在する。野口はマイナーな研究対象にとどまりながらも、かなりの数にのぼる研究者が折りに触れては関心を寄せ、その重要性を指摘してきたこともたしかである。

ただし、野口に対する公正な評価は主流にはならなかった。英文学や比較文学の立場から、野口の英文学世界への貢献度を問う場合には、そこにある限界が潜んでいたのではないかと考えられる。というのは、英文学を専門に研究する立場から、野口の文学上の貢献度をはかるのは、なかなか判断がつきにくいところがあったように見受けられるからである。それには、以下のような背景がある。

日本紹介者として国内外で広く知られてきたB・H・チェンバレン(Basil

Hall Chamberlain:1850-1935)は、第五版以降の『日本事物誌』*Things Japanese* (一九〇五(第五版)・一九二七(第五改版)・一九三九(第六版))の「日本関係書」の項目の中で、日本人の英語で書かれた日本関係書をいくつか紹介しているが、野口に対しては、ほとんど「蛇足」のように、次の一文を挿入したのみである。

And —— though they have little relation to Japan —— the so-called poems of Y. Noguchi, which have made a sensation (in California).

そして——日本関連とはほとんど関係がないが、野口の「いわゆる」詩が、(カリフォルニアでは)評判となった。(訳文、堀)

つまり、チェンバレンは野口の詩を「詩」と認めておらず、文化的後進地域である「カリフォルニア」では評判となったと軽んじている。一八九六、七年時点であれば、「カリフォルニアで」と限定しても間違いとはいえないが、一九〇三年には*From the Eastern Sea*が英国文壇で大評判となっている。そのことをチェンバレンが知らないはずはない。さらに野口は一九一〇年代、一九二〇年代と、俳句を初め日本文学紹介、浮世絵を中心とした日本美術紹介の著作を多数出し、英語圏のみならず、フランス、中国、インドでも日本紹介者としてよく知られている。一九三九年の第六版においても追記・改訂せずに無視を通しているのは、意図があつたことである。

チェンバレンが野口を軽視したのは、野口が、チェンバレンによつて誤つて伝えられている日本認識を改善させることを自らの使命であると、明言していたためである。²⁴

一九二六年、同じ英国人で帝国大学教授ロバート・ニコルスは、野口についての評論を書く中で、チェンバレンの*Things Japanese*が「いかに矛盾に充ちたものであるかを注意していただきたい」と書いている。²⁵

かし、チェンバレンのように欧米で広く認知され、また東京帝国大学を中心とした日本のアカデミズムでも長く権威を保ってきた欧米日本紹介者の態度が、以後の国内外の研究者に影響をあたえてきたことは否めない。

そして、戦後の日本文学研究の権威であつたアール・マイナー(Earl Roy Miner:1927-2004)は、*The Japanese Tradition in British and American Literature*(1958)『西洋文学の日本発見』(一九五九年)の中で、野口に「ついで」次のように書き下ろした。

一時代前の読者が、日本を広く紹介したという点ではハーンの後継者ともいふべきヨネ・野口の作品に感激したなどという驚くべき事実や、ヨネ・野口はジョン・グールド・フレッチャーへも周知のような影響を及ぼしていることなどは、かなり思い切つて歴史的精神をほしのままにしなければ、とうてい納得出来ることではない。(中略)野口の評判が異常に高かつた理由の説明としては、少なくとも二つある。まず第一に、彼はたまたま英語を使つて書いたほんものの日本詩人だと考えられていたことである。いかに彼がほんものではなかつたかということは、彼の『日本の発句』(一九二〇)をよむとわかるが、そのなかで彼は、シラブルを数える日本の詩型の保存を計り、また或る時は、単に「俳句精神」の複製版を試みたりしている。(中略)彼の人気の第二の理由は、彼がその当時の英国詩人たちのスタイル、時にはその最悪のスタイルを用いたというまことに皮肉な事実によるのであつた。彼の「発句」は、英国人たちの発句同様に、異国的なものであり、彼の自由詩は明らかにホイットマンより靈感を受けたものであつた。また、彼の「散文詩」の実験は、その技法において、エイミー・ローウエルの「調べある散文」とほとんど同一であつた。当時流行の英詩のセンチメンタル型を反映することに大童になり、しかもなお一個の日本人たることから抜け切れないという——これが野口の本領であつた。

(中略) 日本的なもの聞けば何でも無条件に鵜のみにした当時においては、野口のように、日本人の血統をもっているとか、あるいは、日本を訪れたことがあるというだけの理由で、詩人としての名声を博した人がたくさんいた。³⁵

徹底的に否定的である。野口に対する評価は、これらの欧米の大御所らの強い影響力に左右されてきたのが実際のところではないだろうか。英文学会でこれに声高に異を唱えることは危険であるし、ましてや野口には「戦争協力者」「帝国主義者」の烙印が押されていた。特にエズラ・パウンド(Ezra Pound:1885-1972)に注目する研究の場合には、このマイナーの見解にならう傾向が強かったといえる。

西欧のモダニストたちが「二流」の日本人からインスピレーションを受けた可能性があったとしても、一介の若者が重要な役割を果たしたはずがないという予断が、欧米人研究者の中にも日本人研究者の中にも支配的であったと思われる。

確かにマイナーが言うように、この時代、「日本人」という名を使って国外を《紋付きに羽織り袴でのしあるいてい》³⁶似非日本人芸術家は多かったらしい。また国内にも、英語やフランス語で詩を書いた詩人たちもいたことはいはれた。しかし、そのような連中と野口米次郎は全く異なっている、と戦後に金子光晴が述べている。「日本」を喧伝して闊歩する海外の「日本人」の多くが、《天下の土と交ったというだけで終わっている》³⁷に対して、野口は《俳諧や、日本短詩の精神の沈黙の力の無限の広がりを紹介した功績》のある《特別》の人である、と³⁸。つまり、野口が海外の著名人の誰々と交友があった、国外作家の誰々を日本に最初に紹介したという類の「研究」では不十分なのであり、野口が《沈黙の力の無限の広がりを紹介した》こと、そのことの意味を時代状況と付き合わせて問う必要がある。

先にもふれたが、英米詩歌における《モダニズム》思潮の中で野口が問

題にされるのはイマジズムの推進者パウンドとの関係であった。マイナーがJ・G・フレッチャーやA・ローウェルに触れているのも、野口のイマジズム運動とのつながりに関することを指す。二〇世紀の英詩、とりわけアメリカの現代詩は、パウンドの出現が出発点とされるからである。パウンドは現在も英米で絶大的な評価を得ており、日本での人気も大変強い。

それゆえ、野口とパウンドらイマジストらモダニズム詩人らとの関わりについては、しばしば論じられてきたのだが、アール・マイナーに代表されるように、野口の役割については概して否定的な見解が多く、野口の貢献はよく知られていない。

野口のパウンドやイマジズムへの貢献は、一九二〇年前後から内外で言われてきたことである。戦後にも、野口の弟子筋にあたる斎藤勇や尾島庄太郎ら、英文学研究の権威者たちが、あまりおおっぴらでないにせよ言及しているし³⁹、一九七〇年代には外山卯三郎や渥美育子氏らによる積極的な考察があった⁴⁰。またアメリカでは一九八〇年代半ばより Yoshinobu Hakutani (伯谷嘉信) 氏が指摘し論説してきた⁴¹。

それでも、日本の英文学研究の中では、パウンドは高く評価され、パウンドと親しくした西脇順三郎は時に正統詩人として持ち上げられても、野口は「二流」とみなして言及を控えるという図式が、いまだに根強い。英文学研究の立場から野口にアプローチする場合には、このような限界につきままとわられてきたのである。

パウンドは、T・S・エリオットやJ・ジョイスなどの多数の若い芸術家を発掘したことがよく知られているように、若者の才能を発見する能力に長けていた。ヨネ・ノグチ研究を長年行っている和田桂子氏は、そのパウンドは野口に対しては触手をはたらかせなかったが、西脇順三郎の詩を読むやいなや岩崎良三に手紙を書いてノーベル賞に推すべきだと主張したことを挙げている⁴²。パウンドが評価していないことをもって、野口は一

流ではないとする論法である。しかし、パウンドが西脇を評価したのは一九五七年、野口の死後十年が経つてからのことである⁸³。それをもって、パウンドが野口よりも西脇を評価していたなどといえることではない。しかも、パウンド自身、第二次世界大戦中のファシスト党への参与を咎められ、すでに詩人として権威を失っていた⁸⁴。

しかし、このような論法や考え方が、英文学の専門家の間では長く受け継がれてきたのである。小玉晃一氏（一九七五年当時）は、野口がパウンドと関係をもちながらも『パウンドからほとんど影響を受けていない』といひ、『パウンドは、どの程度ヨネ・ノグチを評価していたのかよく分からない。少なくともあまり問題にしなかったことは確かである』と述べた⁸⁵。児玉実英氏が *American Poetry and Japanese Culture* (1984) の中で野口に触れるのは、クラブシーへの感化の可能性が論じられたことがあった、という一件に過ぎない⁸⁶（この件については、八章一七頁上段、註記一一に述べる）。また、パウンドと西脇順三郎を論じる新倉俊一氏（二〇〇三年）は、パウンドの野口に対する『評価は「二流の詩人」であった』としているに過ぎない⁸⁷。

だが、そもそも「パウンドが野口に触手を働かせるか否か」という問題設定自体が倒錯したものである。野口の方が、パウンドよりも先に英米文壇で評価を受けていたのである。実際に即していえば、野口がパウンドのことを、英米詩壇を代表する重要詩人として捉えてはいなかったという方が正確である。野口はイェーツからパウンドを若き助手として紹介され、新世代の若者というくらいには認識はしていたものの、この段階ではまだそれ以上ではなかったのである。

このように欧米の日本研究者や日本の欧米研究者たちのあいだには、野口が当時の主要な欧米文壇人たちから評価されていたことを知ってはいいても、それをまともに考えようとしない奇妙な態度が続いていたのである。西欧崇拜の感情があったのかと疑われてもしかたがないのではないか。野

口が欧米文壇に影響を与えたか否かの判断をくだす前になされねばならないのは、いったい野口がいつどのようにして欧米文壇で活躍するようになり、どのように評価されていたのかについて事実を確認することである。そしてまた、従来考えられてきたように、日本文壇において野口はほんとうに「二流詩人」として扱われていたのか、についても検証するところからはじめなければならぬ。これらのことが整理されないうままに、偏見にとらわれた一方的な評価や部分だけをとらえる解説が、くりかえされてきたのが実状だったといえよう。

そして、たとえ野口が「二流」の英詩人としてあつかわれていたのが実態だったとしても、その「二流」とは誰に決められることなのだろうか。「詩歌」（あるいは「人物」といってもよいが）の善し悪しに絶対的評価というものが存在するのだろうか。詩歌や文学作品が、文化や社会の中で生み出されているものであるにもかかわらず、またそれに対する人の評価も政治的・社会的・恣意的認識から完全に自由であるわけではないにもかかわらず、「二流／三流」でランク付けしてしまうのは危険ではないか。

そもそも欧米の比較文学研究やポストコロニアル研究の中で、「英詩人」としてのR・タゴールは、片方では「英詩人」としては一流ではないとの評価を下されながらも⁸⁸、その人物存在の偉大さと国際的影響力が今も繰り返し論じられている。もちろん、タゴールは近代インド社会で、近代が生んだ最高のベンガル語詩人・インド詩人として活躍したのであり、彼の英詩がベンガル語詩の域にまで達していなかったとしても、詩人の価値に對してなら重要な問題を及ぼし得ない。私が釈然としないのは、現在もなおタゴールが英語圏文学史の重要な旗印として論じられ、インドの「サバルタン」の代弁者としての国際的な評価とシンパシーを得ているのに比較して、一時期は並び称されたこともある野口米次郎はどうなのか、という疑問である。大英帝国の植民地であるインド生まれではあるが富裕層で最上クラスの文化環境に育ち、独立国家代表の詩人として永遠なる名声を

獲得しているタゴールと、初期移民群の中で渡米して貧しい生活の中から英詩を書くという「声」を獲得したものの、「二重国籍者」といわれながら世界戦争の時代を生き、戦後は「戦争協力者」として非難を浴び、無視され抹殺に近いあつかいを受けている野口米次郎と、いったいどちらが「サバルタン」等の現代用語のレッテルや理論に当て嵌まるだろうか。私の問題意識の端緒は、この疑問にあった。

〇三 研究史・評価史

さてここまで、野口に対する見方として一般的だと感じられる批判的な風潮をみてきたが、戦後の野口に対する言及は一方的なものばかりだったわけではない。

戦後の野口研究史において最も重要な動きは、米次郎の娘婿の外山卯三郎⁸⁶が、一九六三年、六六年、七五年と、野口研究の論文集『詩人ヨネ・ノグチ研究』を三冊編纂し、野口を公正に再評価する気運を盛りあげようと努めたことであった。この論文集は、野口の生前に発表されていたノグチ評を集め、それに当時から野口研究に尽力していた亀井俊介氏や渥美育子氏らの論考を加えたものである。各地に散在する野口の書簡を収集整理した渥美育子氏や、二〇世紀転換期のアメリカ文壇や明治近代の系譜の中で野口の立ち位置をさぐった亀井俊介氏による論稿は、後進の研究に寄与しているばかりでなく、重要な指針を与え続けている。それらの基礎の上に、現在の野口研究は成り立っている。

これらの野口研究で中核となってきたのも、やはり英文学との関連である。野口の欧米文壇への貢献については、英米両文壇で次々と発表された野口の英詩が、早い時期に俳句と俳句的象徴性を紹介したものであり、それが世紀末の英米詩壇やイマジズム (imagism) 運動⁸⁷などを刺激するものであったということが、論究されてきた。

大正期に野口に教えを受けて育ち、戦後に英文学研究の権威者となって

いった面々も、数は少ないとはいえ、英文学史上の野口の貢献を語り残している。斎藤勇は、野口が《英米におけるFree verse 運動に対する促進者》であり、俳句詩の実例を示したことは、注意すべき彼の業績である、と述べる⁸⁸。尾島庄太郎は、『Seen and Unseen(1896) & From the Eastern Sea(1903)』⁸⁹、早くからイマジストの手法が示されていることを指摘し、野口は一九世紀末に早くも英詩壇の先駆的な役割を担ったとした⁹⁰。南江治郎は、野口の英詩が《Imagists 詩派の人々や free verse を書く詩人達》に多大な影響を与えたことは《偶然の結果》にすぎず、それゆえ、野口はその《結果に誇る事なく》常に努力したこと、その《永久不変のその精進さ》をより尊敬する、と述べている⁹¹。野口が自分に厳しく人情に厚い性格であったことは、多くの者の回想に示されていることである。山宮允氏も野口について次のように語っている。

ホイットマン以後のその衣鉢をつぐ者の無かった世紀末アメリカ詩壇に自由詩の範を示し、日本詩歌の精神を、集中と暗示と沈黙の教を誨えて英米詩壇に新風をもたらし、今世紀十年代の新詩人クラブシイ、サンドバーグ、フレッチャー、ローウェルその他の自由詩作家の輩出を刺戟し、英米の詩界に生気を与えた異質血液注射の功労者であることを忘れてはなるまい。⁹²

このように生前の野口に親しんだ英文学者たちは、野口を回想し評価を与えていたのである。だが、このことは、野口に関心を持ったもの以外には、あまり知られてこなかったのではあるまいか。(いや、関心をもつ者でさえも、まともに検討しようとしてこなかったことは先に見たとおりである。)野口を知る詩人たちもまた、野口の人生についての共鳴を戦後に記していた。これらもよく知られてきたとはいいがたい。

一九七〇年前後に野口再評価に尽力した外山卯三郎⁹³は、野口が十七字、

俳諧詩論から独自の短詩形の叙情詩論に到達し、それが、欧米詩壇に影響を与えていたと説く。野口が創作初期から芭蕉の俳諧精神を詩作の根底に取り入れていたことを論じ、そのことの英米文壇への波及効果について考察をめぐらした。

渥美育子氏は、野口の英文の詩の散文体は定型になじんだ欧米の人々の注意をひき、英語のうまくない表現が、俳句に初めて触れたような新鮮さを与えたのだと論じた。野口の詩世界は東洋と西洋のイメージを対置し融合させたものであり、彼の米英詩壇への貢献は、《イメージズ運動に二十年先立つ九〇年代に、自然発露的ではあるが自由詩体 (free verse) で詩を書いたこと、俳句的なイメージの重畳を使って凝縮した暗示に富む表現を用いたこと、東洋という異国情緒と彼らが教養ある人はすべて haiku poet である」と信じていた日本という国の精神を伝えたこと》の三つであると述べている⁴⁶⁾。

同様に、亀井俊介氏は、《極端な低迷期》にあった当時のアメリカ詩壇に、野口は新風を吹き込む存在であったと論じる。野口の持ち込んだ日本の詩が《言葉の技巧ばかりの詩に飽いていたアメリカ詩人たちの求めていたものに通じ》て、それゆえ、古い詩風に抵抗しようと願っていた当時のアメリカ詩人たちの《仲間》として《師》として、野口は歓迎されたと説いた⁴⁷⁾。長年にわたって野口研究の道を照らしてきた亀井俊介氏は、特に世紀末のアメリカ詩壇における野口の影響や、ホイットマンとの影響をくわしく論じてきた。

さらに、野口とイエーツとの親交はよく言及されることであり、英国を中心とした欧米の文壇で、野口の詩論が日本の詩論、東洋の詩論として新鮮味をもって扱われ、関心をもたれていたことはまぎれもない事実なのである。しかし、実際にそこで何が語られたのか、象徴主義から《世紀末》を経てイメージズムに続く欧米文壇の精神的風土とジャポニズムの風潮の中に、野口がどのように自分の論点をはめこんでいったかということについて

ては、なお十分に検討されてはこなかった。特に、野口が「芭蕉」を中心に語った詩歌論による影響と意義とに関心をよせる研究は、いまだほとんどなされていない。

このような研究が英文学の立場からなされてきたにもかかわらず、日本研究や日本文学研究の分野においては、野口の存在は無視されてきた。ここに従来の野口研究の最も重大な欠陥があるといえよう。野口が日本語詩歌や日本語著作を膨大に残しているにもかかわらず、その研究は皆無に近いのである。野口の詩作や詩論・文化論・芸術論などの評論類が膨大であるだけでなく、且つその同時代詩人たちへの影響も少なくなかったにもかかわらず、野口の日本語文献の検討が敬遠されてきたのである。

野口の論述の視野が全世界に及び、また評論家としては「詩」的な独自性・獨創性に満ち、懐疑的で屈曲した部分も多いため、なのであるか。日本の側から論じるに際しては、最終的には野口の関わった近代の「日本」、あるいは「戦争」への論究を避けて通るわけにはいかず、暗雲を回避したため、なのだろうか。

野口の「日本」に言及がなかったわけではない。だが、野口が日本近代文学史でいかなる位置を占め、日本文化論者としてどのような国際的役割を果たしたかについて、総合的な認識はほとんど行われてこなかった。そのことは、たとえば次のようなところにも端的に示されているよう。

野口米次郎の遺族でもあり、岡崎義恵に師事した野口進は、野口米次郎の文芸観について《一言で蔽えば「東洋的」と言い得る》と述べたあとで、野口米次郎の主唱した自然礼讃や自然合一の思想が、《実に西行、芭蕉以来、我国芸術界の巨擘に共通するアナクロニズムであると非難する批評家もあったが、私（野口進）は彼（野口米次郎）の自然観が徒に奇を衒ったものではなくて、万人に認められた、広く深い伝統に根ざしたものとたる事を喜ぶものである》（括弧内、堀と結んでいる⁴⁸⁾。ここには、そもそも自然合一の思想がアナクロニズム（時代錯誤）どころではなく、国際思想潮流の先

端にあつたという歴史的な認識が、すつぱりと抜け落ちている。自然合一の思想をいうときには、ホイットマン思想の影響を考え、象徴主義思想の同時代状況に触れる必要があつたにもかかわらず、日本と英米の文学や哲学を切り分けられて論じてきた点に問題があつたのではないだろうか。

こうした欠点に対して、亀井俊介氏は『ナショナルリズムの文学——明治精神の探求』の中で、野口を次のように位置づけた。

ヨネ・ノグチの文学は、今日、西洋と日本のどちらにも属さない取り扱いをうけている。ノグチ自身が生前からそのことを自覚し、自分が「二重国籍者」になつてしまったことを自嘲しなければならなかつた。だが、彼の生涯のドラマを「悲劇」であつたとするなら、その悲劇は日本の独立と近代化を志向するナショナルリストが振るわなければならなかつた両刃の剣を、「徹底」してふるつたことであつた。つまり「二重国籍者」性こそ、日本主義文学者ヨネ・ノグチの存在意義を積極的に証明するものであつたと私は思う。(中略)ヨネ・ノグチは、この後、日本が政治的にも文化的にも困難な国際関係の中に入っていくにつれて、さまざまな動揺を重ねながら、孤独の生き方を深めていった。しかし彼こそ日本のナショナルリストの一つの悲壮な現実であつたのではないかと思つたのである。⁴⁹

野口が《日本の独立と近代化を志向するナショナルリストが振るわなければならなかつた両刃の剣を、「徹底」してふるつた》ということは、まさにそのとおりであろう。しかし、いったい野口は生前から《西洋と日本のどちらにも属さない取り扱い》を受けていたのだろうか。「二重国籍者」であるという自己評価とは、単に《自嘲》にとどまるものだったのだろうか。私自身は、《日本が政治的にも文化的にも困難な国際関係の中》の《日本のナショナルリストの一つの悲壮な現実》を野口に見るといふ亀井氏の立場に共

感できる。しかし、他方には、野口を《戦時期メガフォン》と見る立場がある。この立場は、《動揺》や《孤独の生き方》や《悲壮な現実》といった評言に納得しないのではなからうか。

このような問題意識から、本論はこの《日本のナショナルリストの一つの悲壮な現実》が実際のところ何であつたのか、ナショナルリストとは何か、野口の「二重国籍」性とは何を指すのか、それは《自嘲》にとどまるものであつたのかそうでなかつたのか、ということについて丁寧に検討してみたいのである。ここには、二一世紀を生きてゆかねばならない人間が、不断に突きつけられる普遍的な問題が満ち溢れていると考えるからである。

さて、亀井氏や渥美氏の以後も、多くの者が大小さまざまに野口についての筆をとつてきたのだが、野口の人生の総体を頭す論は長く出ていなかった。一九七〇年前後に外山卯三郎らがりあげようとした野口再評価の気運ほどの動きは、その後はあらわれていなかったように思う。

ただし特にここ数年、野口米次郎に対する関心は、急激に高まってきているように感じる。とりわけ、二〇〇七年冬に『ヨネ・ノグチ英文著作集 (Collected English Works of Yone Noguchi)』の詩集・小説評論版六巻本が亀井俊介氏の解説付で刊行され、二〇〇八年冬には美術論版三巻本が稲賀繁美氏の解説をもつて刊行されたことは、その潮流に拍車をかけているだろう⁵⁰。それ以前には、アメリカの Hakutani Yoshinobu 氏が *Selected English Writing of Yone Noguchi* vol. 1-2 (1990, 1992) を出版し、日本では『野口米次郎選集』(クレス出版、一九九八年)が出版されていた。どちらも野口作品のアンソロジーであつた。稲賀氏は、「一國文学研究科」群に対抗して「比較文学研究科」の存続を正当化するために、「世界文学」を志向する必要性があると提案する中で、野口米次郎の名前に触れている⁵¹。まさに今、野口の生涯が見直され、さまざまな視点からの研究に取り組みされる時期を迎えているのではないだろうか。

○五 本研究の目的と方法

本論は、第一に、野口の生涯を通じての活動の全容が明らかにされてこなかったことの克服をめざす。そのために、ほぼ年代記評的な体裁をとる。

野口米次郎の生涯は、明治・大正・昭和の敗戦時にまで及び、また著作も、日本語・英語の二カ国語で書かれているばかりでなく、作品数が多数であり、執筆内容も多岐にわたる。本論では、野口の刊行著作のみならず、さまざまな雑誌に掲載された多数の資料や新たに発掘した資料を用いて、野口の仕事とそれに対する周囲の評価を整理する。

第二に、野口の文学世界の本格的な探究の基盤をつくるために、野口を取り巻き、変動を重ねた同時代の国際的、また国内的な諸文学の動向を明らかにし、それらの再考を試みる。

第三に、野口米次郎の仕事の範囲は、文芸にとどまることなく、日本美術や浮世絵、能・狂言の海外への紹介者として活躍したことを無視するわけにはいかない。これらの野口の仕事が、海外のジャポニスムにどのように働きかけ、どのような役割を担ったのかについて考察する。

そして、これらを行うためには、日本近代の思想潮流と二〇世紀前半の国際的な思想／文化の交流の様相を鳥瞰することが必要になる。総じていえば、野口という人物とその作品の再評価を課題の中心に据えるが、そのために、従来の日本文学・英文学という個々の領域を超えることだけでなく、文化全般、さらには思想全般の国際的、国内的な動向とを関連づけて考察する立場をめざしたい。

その再評価の立場は、日本〈近代〉の方向性と位置とを再考することに向かわざるをえない。従来の見解に生じた野口を「二流」視する見解にはふたつの立場がある。その多くは、西欧近代的な立場から、野口は異質で二流で遅れたものとする見解である。それに対して日本の側からは、「外国人の情操」をもつ異質さがめだつて二流視されたのである。しかし、野口のような作家に対して、西洋近現代なのか、日本的ないしは東洋的なのか

かという対立軸をたてて考える思考方法そのものが無効ではなからうか。いや、野口にとどまらず、日本近現代文学や文化についても、そういえるのではないだろうか。つまりは、野口を通して、日本〈近代〉の方向性と位置との再考を試みる。

従来にも比較の視角は示されてきたのだが、従来の英文学研究で支配的な個別の作家検証を主とする方法論（たとえばホイットマン研究、パウンド研究などから表出してくる野口像の論証）には限界があり、それによつては野口の総体は明らかにされてこなかった。それに対して、本論は、とくに従来の野口研究に希薄であった日本文学研究、文化研究の側からのアプローチに力を入れる。しかし、その際に国際的同時性に着目することによって、一国文学史が陥りやすい欠点を克服し、国際的な動向と、そのなかで、野口が果たした役割と野口という存在とを考察評価する。

端的にいうなら、野口米次郎という人物をめぐる個々の小さな出来事の連鎖を通して国際的、国内的文化潮流の様相を再考していくのが、本論の方法である。しかも、それが一国の文化伝統とは何かを問うこと、すなわち、日本〈近代〉の方向性と位置とに再考を促すことにつながるというしくみである。

アプローチの方法の一貫性を保つためには、過度に一部の問題にこだわることせず、作品論、伝記研究、カルチュラル・スタディーズ文化研究など、野口という人物の本質とその時代の中の意味を解明するために有効だと思われる方法を、適宜用いてゆきたいと考えている。

○六 本研究の構成

本論は大きくわけて、三部構成をとる。第一部は、「出発期——さまざまな〈東と西〉、混沌からの出現」と題し、野口米次郎の初期評伝の機能をもたせる。詩人野口米次郎はどのような形成されていったのだろうか。

第一章で野口の渡米までの成長過程を確認する。英語学習の様子や早くから芭蕉俳諧にしたしんでいたこと、渡米の動機などを考察する。

第二章では、アメリカ西海岸で英詩人としてデビューする背景を探る。野口のアメリカ詩人らとの関わりと、アメリカ西海岸のボヘミアニズムの潮流下での野口の存在意義については、従来も指摘されてきたが、ここでは伝記的に時代状況と文化潮流を再確認していく。とくに野口が詩人としてデビューした当時の状況を、その周辺の詩人たちの理解や当時の国際的な文化潮流をにらみながら解説する。

第三章は、西海岸を離れて東海岸に移った野口がジャポニズム小説の隆盛期に便乗して執筆した日記風小説 *The American Diary of a Japanese Girl* に焦点を当てる。どのような文化背景からこの作品が評価されたかをにらみながら、野口の特異な立場と視点の独自性を探る。当時流行していたジャポニズム小説や演劇への批判や、欧米社会の誤った日本理解に対する憂慮、日本文化や詩歌の紹介など、後年まで続く野口の問題意識の原点をここに探ることができる。

第四章は、英国詩壇で詩集 *From the Eastern Sea* が一躍人気を博したことについて、どのような立場から、いかなる評価がおこなわれたのか、イギリス詩壇の状況、時代状況をあわせて考察する。象徴主義や東洋の詩歌形式への関心を背景に、野口の発表した英詩の方法や表現がいかに受けとられていたかを検討する。また、一九〇三年当時の野口がもっていた、翻訳や英詩作に対する自覚と意図とを考える。

第二部は、「東洋詩字の融合と探求——象徴主義」という名のバンドラの箱」と題して、英米詩壇での華々しいデビュー後の野口の人生中期の文筆活動をみていく。

第五章は、野口の一九〇四年の帰国が、日本の詩人たちが象徴主義詩を移入する時期と重なっていたこと、欧米において象徴主義の文脈で評価を受けた野口が、象徴主義を芭蕉と比較して説明したことが、日本国内での

芭蕉再評価の気運につながっていったことを明らかにする。

そして第六章では、日本帰国後の野口が、日本詩壇との関係のみならず、積極的に英文執筆に取り組み、国外に著述を書き送り、日本文化の解説に努めていたことを再構成して示す。野口が国外のさまざまな新聞雑誌媒体に発信している内容とは、舞台芸術や美術、そして政治状況と、多岐多彩であったことをみていく。また、帰国後に刊行した詩集 *The Pilgrimage* や評論集 *Through the Torii* が何を伝えたものだったかを検討する。またここで、野口の能・狂言についての翻訳紹介の活動について、同時代的な背景とともに検証する。

第七章では、日本文化の解説者としての一つの重要な役割を演じた一九一四年の英国講演をとりあげ、そこで野口が何を語り、いかなる評価を受けたのかという点を解明したい。翻訳の問題を含めて、野口の叙述に対する国内外での反応を整理し、検討する。

第八章では、欧米モダニズム思潮の中の野口の位置と評価、その時代背景について再考する。エズラ・パウンドとの関係も、ここではつきりさせる。野口の英米詩壇との関係については従来も研究が行われてきたが、英詩改革を試みた英詩壇やアメリカ詩壇と野口との関係を、改めて論証してみたい。とりわけ、英米詩壇のモダニズム思潮が東洋への指向性を深めてゆく様子を、インドの詩人たちとの関係なども含めて明らかにする。

第九章では、日本詩壇に視点を戻し、大正期詩壇の中で野口が果たした役割を解明したい。野口が日英米の詩人たちの架け橋となろうとした「あやめ会」が挫折して以後の、野口と日本詩壇との関係については、従来ほとんど研究がなされてこなかった。しかし「あやめ会」挫折以後も、野口は大正詩壇の中で大きな存在感を維持している。その様子をいくつかの詩雑誌を検討する中から明らかにする。

第十章では、大正から昭和への転換期、つまりさまざまな思潮の混沌として渦巻いたこの時期に、野口が詩壇でいかなる位置にあり野口自身の指

向性がどのようなものであったのかについて考究する。野口が文化相対主義的な観点から国内外に向けて語っていた伝統意識と前衛意識の重なりが昭和初期に日本主義が立ちあがってくる兆しと、どのような関係にあったか、浮き彫りにしたい。

第十一章では、野口が共感を示していたラフカディオ・ハーンについての著述とその内容を明確にし、日本主義の潮流に巻き込まれる〈境界人〉としてのふたりの位置、アイデンティティについて考える。

第三部は「境界者としての立場と祖国日本への忠誠」と題して、野口の人生の後半を論じる。

第十二章では、野口の〈境界〉性や自己存在の不安定さについて、従来指摘されてこなかった局面を提示したい。野口は、人類の普遍主義に立つ文化相対主義の立場から、自国の文化を創出することを考えていた。その立場は時代とともに政治問題や民族・国家の独立問題と関わることを要請し、かつ野口自身も「詩人」としての自覚からそれを当然のことだと考えていた。しかし、二〇世紀の国際関係は、その立場に亀裂や動揺を生みだしてゆく。

第十三章では、早くからインドとアイルランド文学の共通性を意識していた野口のアジア認識を、インドとのかかわりを中心に論じていく。野口は周囲の要請によってインド各地で講演し大歓迎を受けたが、その後、タゴールとの間で日中戦争をめぐって国際的に注目を浴びる論争を起した。野口は「帝国主義」のイデオログとしてふるまったのか。その真意と、ふたりの立場の相違について改めて考える。そして、野口のインドに対する発言や論述は、日本の対インド政策を背景にして、ラジオの国際放送などによって積極的に喧伝されていく。従来はタゴールとの論争ばかり注目されてきたが、それは野口と「インド」との関わりの一ページに過ぎないことを、インドで発掘した資料をもとに明らかにする。

第十四章は、野口の戦時期の詩について従来知られていなかった作品に

も照明を当て、野口米次郎の詩想の全容の解明に努めたい。野口が「日本」の戦時下にもたらしたものが何であったのかを改めて考えることになろう。第十五章は、敗戦後の野口と没後の評価を扱う。戦時下に書いた詩を戦後、再び掲載した意図は何だったのか。一九四七年に没した後、彼が生前、示しつづけた国際的視野と説きつづけた芸術文化的理想は、顧みられることなく、完全に消滅してしまったのだろうか。大手をふってまかり通る野口に対する非難の風潮のなかで、野口周辺にあった人びとの回想記を探り、野口の遺志が没後もひそやかに受け継がれてきたことにふれたい。本論の最後に、彼に見捨てられたはずの遺児イサム・ノグチのなかに生きていた米次郎の姿を浮かびあがらせることにしよう。

「川路柳虹が「野口米次郎」の項目を執筆（藤村作編、『日本文学大辞典』新潮社、一九五一年一月三〇日、四五四頁）。

「古川清彦が「野口米次郎」の項目を執筆（日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典』第三巻、一九七七年一月一八日、三三三三頁）。

「外山卯三郎が「野口米次郎」の項目を執筆（『増補改訂・新潮日本文学辞典』新潮社、一九八八年一月二〇日、九七九・九八〇頁）。

「古川清彦『日本近代文学大事典』前掲、三三三頁。

「同前」。

「外山卯三郎『増補改訂・新潮日本文学辞典』前掲、九七九頁。

「シヤンティニケタンのタゴール博物館においても、野口についてのパネル紹介がある。インドやバングラディッシュでは、タゴールと論争した日本の詩人として、野口の名は想像以上に知られている。インドで野口の研究が多いわけでは決してないのだが、

Rustom Bharucha, *Another Asia: Rabindranath Tagore & Okakura Tenshin*, (2006, Oxford Univ. Press) が野口を論じたものとして挙げられる。

「外山卯三郎氏は、野口の評価に常にまわりついている朔太郎の〈野口観〉を取り外す必要性を指摘し、朔太郎の野口に対する尊敬の念について〈中央章事件〉の例などを挙げて説明している（萩原朔太郎の見た詩人野口米次郎）『詩人ヨネ・ノグチ研究第二集』造形美術協会出版、一九六五年一月三〇日、八九・一〇三頁）。

萩原朔太郎「詩壇時評」「日本詩人」一九二三年六月、八一頁。(萩原は、野口の詩想を「幽玄な詩想」といい、「底知れぬ哲学的の深刻性」や「東洋哲学の情感深き嘆息」を感じ、「シヨールペンハウエルの憂鬱性」を見ると述べて、非常な尊敬を示していた(同前、八一頁)。

② ドウス昌代『イサム・ノグチ(上)』講談社、二〇〇〇年四月一〇日、四二八頁。
(そのほか、一九〇三年の英国で、自費出版した詩集を多くの著名人や英王室の人々に献本して評価を得たことについては、「正気を疑われるほど途方もないこの戦略が成功した」(五一頁)と書かれている。)

③ たとえば、戦後の比較文学研究を切り開いた島田謹二氏は、野口の国際的な文化活動が「比較文学史上劃期的な出来事であった」(『現代日本文学全集』七三卷、一九五六年一月、四〇三頁)と述べて、野口研究の重要性を指摘しつつも、自身の研究の対象にはしなかった。その後も多くの比較文学者が、再評価の重要性を主張してきた。

④ GHQ主導の文化・言論界の公職追放は一九四六年頃から動き始めるとはいえ、発動するのは一九四七年である。(一九四七年一月四日に、「公職に関する就業禁止、体感、退職等に関する勅令」(勅令第一号。一九四六年の勅令第一〇九号の改正。)及び「昭和二年勅令第一〇九号の施行に関する命令を成立する命令」(閣令・内務省令第一号)が公布・施行された。)

⑤ この野口の対応は、藤田嗣治が戦後にGHQに求められて面会した際に周辺の日本人らの情報に混乱が生じていた例などと比較して考えれば、実に賢明な対応であったように思える。

⑥ 一九四五年一〇月頃(栗林農夫「特信(文化犯罪人の責任)」『同盟通信』一九四五年一〇月二二日)より始まり、一九四五年一月八日に、日本共産党、自由懇話会、自由法曹団共催の「戦争犯罪人追及人民大会(神田共立講堂)で、天皇を筆頭にして一〇〇〇名にも及ぶ戦争犯罪人リストが発表される。文学界からは久米正雄ら二五名が挙げられた。また、一九四五年二月三〇日の新日本文学会設立大会(神田・教育会館)でも、中野重治が文学者の戦争責任追及を提案した。(『新日本文学』一九四六年三月)

⑦ 小新聞『文学時標』(一九四六年一月一日〜一九四六年一月一〇日)は、荒正人、小田切秀雄、佐々木甚一らの若い世代を中心にして創刊された。彼等は大正生まれで、プロレタリア文学運動や共産党の運動が壊滅する頃に運動の一端に触れただけだったため、戦時期の運動経験も、転向体験も希薄であり、自身や自己陣営の責任については追及意識を持っていなかった。このため創刊直後から、若き小田切らの自己や自己陣営の責任意識のなさや、他人を徹底的に批判追及する資格が誰にあるかといった点が論争の争点となり、糾弾する側の軋轢などから休刊に至った。

⑧ 荒正人、小田切秀雄、佐々木甚一「発刊のこぼれ」『文学時標』創刊号、一九四六年

一月一日、一面。

⑨ 「発刊のこぼれ」『文学時標』創刊号、一九四六年一月一日、一面。

⑩ 高村光太郎、火野葦平、中河与一、吉川英治、保田与重郎、横光利一らが、戦争協力、戦争賛美の故に悪質な戦争責任者として個別に糾弾された。『文学時標』の休刊のためか、野口に対しては「文学検察」欄での個別糾弾が行われなかった。

⑪ 創刊号は一万部発行で、最初から反響を呼び、広告もよく集まっていたらしい。(小田切進「その頃のこと」『文学時標』とわたし)『文学時標・復刻版』前掲、六八頁。
⑫ 小田切秀雄「文学における戦争責任の追及」『新日本文学』一九四六年六月。(これは三月二九日に新日本文学会東京支部創立大会において提案され可決されたものの要旨として記述されている。)

⑬ 次に、糾弾する側の資格や糾弾の基準の微妙さが問題となつて、自己批判が起つて、勢いが収束していく。たとえば本多秋五は、戦時中に無名の文学者だから戦争責任が「無疵の立場」なのかと述べて、小田切らの責任意識のなさを批判した(座談会「文学者の責務」(一九四六年二月)『人間』一九四六年四月掲載)。

⑭ 近藤忠義「戦争責任の追及―國文學時評」『文學時標』一九四六年一月一日、四頁。

⑮ チェンバレンによつて挙げられたのは、新渡戸稲造の『武士道』(Bushido, the Soul of Japan)、田村直臣の『日本の花嫁』(Japanese Bride (1893)、内村鑑三の『余はいかにしてキリスト信徒となりしか』(How I Became a Christian (一八九五年)、岡倉覚三『東洋の理想』(Ideals of the East)、それから新渡戸の論文「米國と日本の交渉」、稲垣満次郎(1861-1908)『日本と太平洋』(Japan and the Pacific (1890)、南条文雄(1849-1927)『大明三蔵聖教目録』(A Catalogue of the Buddhist Tripitaka (一八八三年)などである(Things Japanese, 1905, 1927, 1939)。

⑯ 本論で述べるが、野口は一九一四年の英国講演で俳句を紹介したときに、チェンバレンの俳句「epigram」認識を批判し、また謡曲の翻訳を行うにあたって、アストンやチエンバレンの翻訳を批判して、自らの訳出の意図と必要性を明示している。ただし、チエンバレンが「古事記」を英訳し、日本の美点と独自性を発見したことについては、「彼の慧眼に感服せざるを得ない」と述べている(野口米次郎『放たれた西行』一九二八年六月二〇日、春秋社、二二九頁)。

⑰ ロバート・ニコルスは「チャンバアレエンの「日本事情」の項中に、多くの外人の日本に関する意見を列挙してある章を開いて見、そしてそれらがいかに矛盾に充ちたものであるかを注意して頂きたい!」(『文明批評家野口米次郎』『日本詩人』六巻五号、一九二六年五月)と書いている。

⑱ アル・マイナー(深瀬基寛、村上至孝、大浦幸夫訳)『西洋文学の日本発見』昭和三四年一〇月二〇日、筑摩書房、二二二-二二三頁。引用した部分の原文は、以下。⑲

requires a certain indulgence of the historical spirit to deal with the marvelous fact that readers a generation ago were excited by the writing of Yone Noguchi, the successor to Hearn as popularizer of Japan, and an acknowledged influence on Juhn Gould Fletcher.(.....)There are at least two explanations for Noguchi's extraordinary popularity: To begin with, he was taken to be a real Japanese poet who just happened to write in English. How little he was the real article can be seen from his Japanese Hokkus(1920) where he sometimes tries to maintain the Japanese syllabic form an sometimes attempts merely to reproduce "the haiku spirit"²⁸——no mean thing when haiku has meant very different things to three centuries of poets. The second reason for his popularity is the ironic fact that he adopted the styles, often the worst styles, of contemporary poets in English. His "hokkus"²⁹ are as exotic as any of theirs, his free verse is obviously inspired by Whiman, and his experiments with "prose poems" are almost indistinguishable from Amy Lowell's "adenced prose"³⁰ in technique. Here was Noguchi doing his best to reflect current English modes of the more sentimental variety, and yet a Japanese: he assured the age that their own work was truly inspired by Japan. It is to his credit.(.....)There were a number of writers in these years who were either of Japanese descent like Noguchi or who had been to Japan and thereby were allied reputations as poems in an age which seemed not to question anything Japanese.(Earl Miner, *The Japanese Tradition in British and American Literature* 1958, Princeton Univ Press, pp.186-187.)

²⁷ 金子光晴『入道 寛かなれ』青娥書房 一九七四年四月二〇日 『金子光晴全集』九巻 一八八頁)。

²⁸ 同註。

²⁹ 二人は『詩人コネ・ノブチ研究』(一九六三年)には、野口への敬意を若や口の学識を記している。

³⁰ Ikuko Atsumi 'Introduction' in *Yone Noguchi Collected English Letters* (1975, Tokyo, pp.6-16.) 他。

³¹ Hakutani 氏の論文では 'Yone Noguchi's Poetry: From Whiman to Zen' (*Comparative Literature Studies*, 1985Spring), 'Father and Son: A Conversation with Isamu Noguchi' (*Journal of Modern Literature*, 1990Aug.), 'Ezra Pound, Yone Noguchi and Imagism' (*Modern Philology*, 1992Aug.) などがある。また選集の序文 'Introduction' (in *Selected English Writings of Yone Noguchi vol.1 Poetry*(1990), edited by Yoshinobu Hakutani) などがある。

³² 和田桂子「野口米次郎のロマン」(13) 九八頁。(和田氏は、ノブチが西脇の詩を讀んで書いた一九五七年の書簡(Letter from Ezra Pound to Ryoso

Iwasaki, (21/Aug/1957), *Ezra Pound and Japan*, p141)を引用して論を導いている。) ³³ ノーベル賞は生きている作家に送られるもので、かつ政治的な要素が絡むものであるから、作家の評価そのものの議論に賞候補者々々を持ち出すのはナンセンスである。 ³⁴ もちろん、パウンド自身がノーベル賞に「だわりを感じていたのかも」しれない、という「エッセイ」なのではないだろうか。一九五五年に「キングドウェイ」がノーベル文学賞を受賞したとき、「自分たちのパウンドが賞を乞うた」と語っていた。当時の時点では、西脇順三郎たちのパウンド自身の文学的業績の方が賞に相応しいと考えるのは、普通である。

³⁵ 小玉晃一「エズラ・パウンド」『欧米作家と日本近代文学 第五巻』教育出版センター、一九七五年六月六日、二九八頁。

³⁶ Sanehide Kodama, *American Poetry and Japanese Culture*, 1984, Archon Books: Connecticut, p.52.

³⁷ 新倉俊一『詩人たちの世紀—西脇順三郎とエズラ・パウンド』みすず書房、二〇〇三年五月二二日、二二六頁。

³⁸ たとえば、Mahasweta Sengupta による Translation as Manipulation: 'The Power of Images and Images of Power' (Between Languages and Culture: Translation and Cross-Cultural Text, p.159-174.) と 'Translation, Colonialism and Poetics: Rabindranath Tagore in Two Worlds' (pp.57-63.) など、タゴールの英詩は明らかに西洋の「ゴゴニー」の中にある、インクのイメージを表象している、と論じている。また Buddhadeve Bose, 'Tagore in Translation' *Yearbook of Comparative and General Literature*, 12, pp.15-26.) と 'Nibaneta Sen, "The "Foreign Reincarnation" of Rabindranath Tagore, (*The Journal of Asian Studies*, vol.xxv, 1966, pp.275-286.) と 'Edward C. Dimock, Jr., Rabindranath Tagore—"The Greatest of The Bauls of Bengal," (*The Journal of Asian Studies*, vol.xix, 1959, pp.33-51.) には、タゴールの英詩が「いかにインク語の秀逸な詩とは異なっているか」を論じている。

³⁹ 野口の長女二二三の夫が、詩人でもあった。

⁴⁰ 「イメージム」(imagism) は一九〇八年頃から渡英してメーソンの英国文壇人と親交していた米国人エズラ・パウンドが、主唱した詩歌の革新運動で、一九一〇年代にアメリカで隆盛した自由詩の一派を指す。イメージムはフランス象徴主義からの前進であるいはひとつの反動と受けとられている。象徴主義が音楽性だけに頼るような曖昧なものに落ち込んでゆくのに對抗して、イメージを重視し明確な表現をやるために、言葉を簡潔にするという方向に新しい観点をとる。(このあたりに関しては、本論八章で論じている)。

⁴¹ 齋藤勇は「彼が英米における free verse 運動に対する促進者となり、またいわゆる

「俳句詩」の実例を示したことは、注意すべき彼の功績である」と書いている。(齋藤勇「ヨネ・ノグチ」『ヨネ・ノグチ研究』前掲 三二頁)。

尾島は、野口の詩風が《純粹なイマジズムの手法を早くも示している》として、《英詩壇の先駆者的な役割をになう清新な詩が一九世紀末、早くもヨネ・ノグチによって生み出されたことを、敬意と驚異を以てわれわれに思い起すのである》と述べている(尾島庄太郎「英詩人としてのヨネ・ノグチの詩歌―日本的伝統とイメージ―」『ヨネ・ノグチ研究』一九六三年、四九頁)。

南江治郎「詩父・野口先生」『詩人ヨネ・ノグチ研究Ⅱ』一九六五年、一六八頁。

山宮允「野口米次郎論」『詩人ヨネ・ノグチ研究 第一集』造形美術境界出版局 一九六三年、一三二―一三四頁。

外山卯三郎「ヨネ・ノグチの十七字詩とその波紋」『詩人ヨネ・ノグチ研究 第三集』一九七五年。外山氏には、外山卯三郎の野口に関する単独著作には、『詩人ヨネ・ノグチの詩―その(日本語詩)の成立に関する芸術学的研究』(造形美術出版、一九六七年)がある。

渥美育子「文化交流と境界人(マージナルマン)の役割―野口米次郎の場合」『現代英語教育』七十二、一九七一年、四七頁。

亀井俊介「ヨネ・ノグチとアメリカ詩壇」『詩人ヨネ・ノグチ研究・二』六八―六九頁。

野口進「詩人野口米次郎の思想について」『日本文芸論考―古代日本文芸に於ける自然觀照』一九八三年六月一〇日、三〇九頁。

亀井俊介「七章ヨネノグチの日本主義」『ナシヨナリズムの文学―明治精神の探求』一九八八年、一五六―一六〇頁。

ここに全てを列記できないが、春日井真也「ヨネ・ノグチ(野口米次郎)に於ける精神的緊張の意味」(『仏教大学研究紀要』四八巻、一九六五年九月)、小玉晃一「アメリカにおける日本のリテラリー・エミグランツについて―有島武郎、永井荷風、ヨネ・ノグチの場合」(『日米フォーラム』一九六七年七月)、宗左近「西洋と日本―野口米次郎・高村光太郎・西脇順三郎(特集・現代詩の歴史―明治・大正・昭和詩への試み)」(『国文学解釈と教材の研究』19-12、一九七四年十月)、松原博一「赤人とヨネ・ノグチと不尻山」(『国文学論叢』一九七五年十月)、荒木重雄「野口米次郎インドとの出会い・上(表現の可能性(特集)「新日本文学」32号、一九七七年五月)、鹿兒島達雄「詩人野口米次郎と鎌倉近代文学に現れた鎌倉(十一)」(『鎌倉』38、一九八八年九月)、棚木伸明「文化を密偵する二重国籍者ヨネ・ノグチの見たロンドン」(『白百合女子大学研究紀要』25、一九八九年)、紅野敏郎「学燈」を読む(二〇二二)昇曙夢・野口米次郎―上中下―(『學燈』87-8-10、一九九〇年八月)、岩原康夫「エズラ・パウンドと野口米次郎」(『工学院大学共通過程研究叢書』38、一九九〇年)、曾根博義「翻訳と日本語の壁―ジ

ョイス受容史の側面」(『昭和文学研究』31、一九九五年七月)、深沢忠孝「ヨネ・ノグチ論序説―芭蕉とのかかわり」(『国際経営論集』13、一九九七年)、小野孝尚おのこうしよう「野口米次郎研究ノート終焉の地茨城県水海道市から」(『茨城女子短期大学紀要』26、一九九九年三月)、沢田英輔「二重国籍者」の行方―「詩学」二〇〇一年九月、中山弘明「野口米次郎の翻訳言語―第一次大戦期の日本文化論」(『日本近代文学』66、二〇〇二年六月)、羽賀祥一「日本近代における「伝統」内在する価値と力をめぐって」(『歴史評論』647、二〇〇四年三月)や、橋本順光「茶屋の天使―英国世紀末のオペレッタ『グレイシャ』(1896)とその歴史的文脈」(『ジャポニスム研究』23、二〇〇三年)、橋本順光「偉大な人種の消滅―北歐人種と優生学」他(『アメリカ一九二〇年代―ローリング・トゥエンティーズの光と影』金星堂、二〇〇四年五月)などがある。

特に、野口に注目した研究を続けている研究者としては、和田桂子氏(『ジョイスと野口米次郎』『ユリイカ』30-9、一九九八年七月)、連載「野口米次郎のロンドン」(『大阪学院大学外国語論集』33、一九九六年三月)等、伯谷嘉信(Hakutani Yoshinobu)氏(前述「注三」)、またエドワード・マークス(Edward Marks)氏(What about My songs: Yone Noguchi in the West (Modernity in East-West Literary Criticism: New Readings) & Yone Noguchi in W.B. Yeats's Japan(1,2)) (『愛媛大学法文学部論集・人文学科編』一八、一九九五年一月、九月)などがある。

この『ヨネ・ノグチ英文著作集』シリーズの第三集は、「ヨネ・ノグチとリトル・ポエトリー・マガジン」(全三巻)と題して亀井俊介氏の監修・解説で二〇〇九年一月に刊行が予定されている。

稲賀繁美「いま(世界文学)は可能か?―「全球化」のなかで二十一世紀の比較文学の現在を問う」『比較文学研究』九二号、二〇〇八年、一一三頁。

亀井俊介「ヨネ・ノグチとアメリカ詩壇」(『詩人ヨネ・ノグチ研究・二』、四四―七一頁)、渥美育子「世紀末アメリカ文学とヨネ・ノグチ」(『論集青山学院大学一般教育部会』一四、一九七四年二月)など、その他。